



Interview

## 「経営力伝承塾」受講生に聞く

SPE びわこ工場 生産技術部 生産技術課 課長 中尾 勝巳

2022年11月に「経営力伝承塾」に参加し、垣内会長の講義を受講しました。同講義では、垣内会長の入社から現在に至るまでの、ピンチやチャンスの実例、会社を成長へ導かれたさまざまな経験について拝聴しました。中でも、「経営者は責任から逃れることはできない、そして最後は自身が決断しなければいけない」と、重大な決断をされたときの会長の思いが心に響き、究極の当事者意識を心掛けるようになりました。

現在私の所属する生産技術部は、生産性向上による収益性改善と、製造責任を果たすことによる顧客の事業発展に貢献する部門です。製品の安定稼働、メンテナンス性アップ、コストダウンのためにハード構造を改善してきました。また、工程・手順・工場のデジタルツイン適応により、枚葉式洗浄装置 SU シリーズの生産を行う「S<sup>3</sup>-3」での効率的なものづくり、現在の売上規模に対応できる製造体制を構築しました。今後は、他の機種にもこの製造体制を展開し、さらなる生産効率改善をしていきます。

私のモットーは「他責厳禁」と「一生勉強、一生青春」。今の自分に慢心せず、向上心を忘れない。「こうなりたい」という夢を持ち、賞味期限の切れない人材になることを目指しています。今後、自身が会社の経営に影響を与えていくことも視野に入れ、日々新しいことにチャレンジしていきます。

取材時期：2023年



Interview

## Jr.ビジネスリーダー養成コース 修了生に聞く

HD ライフサイエンス事業室 医薬品機材技術課 課長 西川 貴之

2017年10月から受講した「Jr.ビジネスリーダー養成コース」を通じて、視座を上げてものを考える癖がつかえました。現在受講中の管理職向け「ビジネスリーダー養成コース」でも、会長・社長から、より高い視座を持ち経営人材としての考え方を身に着けるよう、激励を受けています。いずれの研修も自分の考えを述べ議論する機会が多く、モチベーションの高い他の参加者から刺激を受けています。

所属するライフサイエンス事業室は、新規事業であることからコンパクトな組織となっており、開発から販売までを一気通貫で手掛けているため、社会課題を受けた製薬業界のお客さまのニーズをダイレクトにヒアリングし、自社の技術がどのように課題解決に役立つかをさまざまな視点から考えることができます。そして、お客さまにソリューションを提案する際には、一方的にならないよう、お客さまを取り巻く状況を思慮した上で、スピード感を持って最適解を提示することを心掛けています。

製薬業界において後発参入となる当社は、既存の競合他社を差し置いて当社を選んでいただけるだけの理由（メリット）をお客さまに示す必要があります。SCREENが参入する意味は何か、SCREENだからこそ解決できる課題は何か、まさに創業の精神「思考展開」の体現が重要だと考えています。

そのために、技術だけでなくバリューチェーン全体に関わり、事業を牽引できる人材になることを目指します。社内外で強いリーダーシップを発揮し、お客さまに「SCREENと仕事をして良かった」と思ってもらえる「ソリューションクリエイター」になりたいと思います。

取材時期：2022年



## Interview

### 現場経験を重ね、お客さま視点で製品を開発する

SPE 洗浄技術統轄部 製品開発部 製品開発一課 主事 加門 宏章

2021年4月から、技術人材育成のためのローテーションとして、HD技術開発室からSPE製品開発部に異動しました。私自身、以前より技術者個人の能力や横連携の強化のため、HD、事業会社を越えた人の異動が必要だと強く感じており、打診があった際はぜひチャレンジしたいと思いました。

入社以来、技術開発部門で基板開発などに携わる中、お客さまの声を直接聞く機会がなく現場感覚が足りないことに危機感や疑問を覚えていました。しかしSPEではお客さまとの距離が近いため、こういった思いは解消し、HDで要素技術開発を手掛けていた時よりも、スピードの重要性を感じています。また、売上数字が各職場に直接影響してくることや、経営方針がどのように落とし込まれて各職場のKPIになるのかを、事業会社に行き身をもって体験しています。一方、SPEでの基板開発フローの標準化など、HD技術開発室で培った経験を活かす取り組みも行っています。

3年後、HD技術開発室に戻るときには、現場経験とお客さま視点を持ち帰るつもりです。顧客満足度向上など「仕事をやる意義」を多面的に把握して開発を行えば、自ずと出来上がるものも変わります。そうしてお客さまにとって、より価値ある製品を生み出していきたいです。

取材時期：2021年

※文中の肩書きは取材当時のものです。